九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

フリードリヒ・ゲオルク・ユンガー著（今井敦・桐原隆弘・中島邦雄監訳）『技術の完成』

森田，團

https://doi.org/10.15017/3053995

出版情報：九州ドイツ文学. 33, pp.85-91, 2019-10-30. 九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：

フリードリヒ・ゲオルク・ユンガー著（今井敦・桐原隆弘・中島邦雄監訳）『技術の完成』

森　田　　團

1

ハイデガーは、『技術への問い』（1953）において、技術とは何かという問いが本質への問いであるにもかかわらず、技術というものの独特の性質上、本質への問い方は適切ではないことを強調している。というのも、とりわけ近代技術において人間は技術の主体ではありえず、したがってまた技術は単純な対象でも、たんなる手段でもありえないからである。ハイデガーの洞察は、ユンガーの技術への接近の仕方に多くの触発を受けていると思われる。というのも、『技術の完成 Die Perfektion der Technik』（1946）においてもまた、技術は真正面から問われることはなく、労働、資本主義経済、社会組織、機械装置などの関係のなかで考察されているからである。ちょうどフーコーが権力を分析する際に取った視座に似て、ユンガーは技術というものが近代という体制を制約しているがゆえに、対象化からつねに免れる力とみなしている。にもかかわらず、ユンガーが技術への本質的な洞察を得ることができたのは、本質への問いを巧妙に回避しながら技術の根本的な在り方を捉えることができたのはなぜだろうか。

ユンガーは本書において自らの方法について簡単に触れている。「対応 Entsprechung」や「照応 Korrespondenz」によって複数の事象を関連づけ、その構造と意味を見出すことである。いわば比喩的な想像力というものによって、現代社会の諸事象や哲学思想が互いに重ね合わされつつ、分析されていくのだが、このことが効果的であるのは、通常は異なる領域にある事象が近づけられ、この関連づけによってお互いが何であるかが、直観的に明らかにされるからである。ユンガーにあっては、知覚と思考は受動と能動の関係によって規定されるのではなく、相互が相互を照らしだす関係にある。経験と理論が、ここでは一致を目指して、展開していくようなのだ。非常に簡潔な記述によってユンガーは事象を描出、分析、解釈していくため、一方で記述は難解に傾くものの、他方で遠くを見通すような洞察、驚くべき予見性が各所に溢れ、それが現在なお汲みつくされていないようにみえるのは、この方法に依るところが大きい。

2

ユンガーの技術への洞察の核心は、いったいどこにあるのだろうか。ユンガーは、伝統

的に二つの自然の説明原理とされてきたもの、すなわち機械論と目的論が、技術においては密接に結びついており、この結合が技術の本質的な徴表であると述べている。

ユンガーによれば、合目的性とはある事象が目的へと関係していることを、私たちの知性が見出すかぎりにおいて生じる。つまり、目的論的な事象の理解とは、ある事象と目的との関係を知性が措定することと切り離すことはできない。自然の観察において、自然現象を目的から理解しようとすることは恣意的になる可能性が高く、このような〈解釈〉が自然科学的な思考から排除されるのは当然のことである。

しかし、機械装置においては、目的を実現するために諸々の手段は一体化しているとユンガーは言う。ある機械が機能するためには、手段はそれぞれ適切に目的に適う動作を行い、一定の役割を果たさなければならないからである。そして、たとえば部品が —— 個々の動作をとっても、それがひとつのまとまりとなっても —— 目的に適っていることは容易に検証しうるだろう。それゆえ、諸手段が合目的的であるのはいわば当然である。しかし、技術的合目的性とはそれ以上のことを意味する。

> この合目的性というものはどこでも常にそれらの手段にのみかかわるものであって、達成された目的そのものにはかかわらないということを理解しなければならない。達成された目的が再度新しい目的のための手段として把握されるとき初めて、その目的は手段としての資格で合目的的となる。(122頁)

このような思考は、因果関係に手段と目的の関係を当てはめ、読み替えているだけのように、つまり二つの事象の関係を因果関係と目的論的関係という二つの観点から眺めているだけにみえる。しかし、ユンガーによれば、これは事をたんに二つの側面からみているのではない。

因果関係とは作用因という原因概念、すなわちある事象が動かされ、生み出されるのは、それに先立つ何らかの事象が原因となっているという考え方に基づく。それに対して目的がある事象を産み出すとき、それは目的因である。これらが相互に一致するのが、あるいは内的に結びついているのが、技術の特徴とされるのだが、では技術的な合目的性の固有性はどこに見出されるのだろうか。

ユンガーによれば、技術領域において諸手段に対する目的が目的となるのは、それが手段になるときである。つまり、技術的合目的性とは、いわば目的を欠いた合目的性であることになる。たとえば、目的 A のもとに機械装置 A の諸手段は一体化している。この意味で機械装置 A の諸手段は目的 A に対して合目的的である。しかし、ユンガーは、このような通常の合目的性の理解では技術というものは理解できないとおそらく考えている。なぜなら、機械装置は、有機体のように独立して意味をもち、自立して運動するわけではないからである。機械装置 A の目的 A は、機械装置 B の手段となることによって意味をもつだろう。だからこそユンガーは、技術的合目的性は手段のみにかかわると言いうるのだ。つまり、技術的な領域において、目的というものは、二つの事象の連関にとって外在的な

のである。言い換えれば、機械機構の連関においては、目的はつねにその外部へと繰り延べられている。

このことによって技術の分野において因果律的な機能と目的論的な機能が内的に結合しているというユンガーの主張が理解されうる。機械は人間の制作物であるかぎり、目的をもっているが、それはつねにその機械の外部にある。つまり、機械の作動の目的は、機械そのもののうちにはない。そうすると、この機械は純然たる作動のメカニズムとして、因果律の帰結としか理解できなくなる。つまり、ひとつの機械装置をとってみれば、そこにおいては因果関係のみが問われるのであり、そのため機械は人間によってつくられたにもかかわらず、目的 —— 何のために —— という問いが一時的に免除されるのである。つまり、ここでは適切に機能することが重要なのであって、何のために機能するかという問いは必要なくなるのだ。あるいは技術的合目的性とは、機能することが目的に適っている、機能すればよいという思考を保障してくれるのである。通常の目的論は、事象の意味をいわば直観的に理解させてくれるものだが、技術的合目的性に基づく思考は、おそらく事象の意味を機能に置き換えるのである。

3

このような技術的合目的性の解釈によって、ユンガーの言う機械的組織化の過程も明確になる。機能そのものの意味、ないし目的を問う必要がなくなれば、機械機構は機能すればよく、このことによって機械化はあらゆる領域で加速されることになるだろう。機能の追求は、いわば技術者の特殊な関心の追求だが、ヘーゲルのいう理性の狡知によって、それが普遍的な目的に適うということがあるのだろうか。実際、技術の発展は、社会全体の利益に寄与しているようにみえる。このことに基づいて、技術の社会への貢献を理解する者も多いだろう。しかし、ユンガーは、技術的合目的性がもたらす悲惨を、『技術の完成』のいたるところで強調し、その可能性を否定している。

ユンガーが挙げる例に基づき敷衍的に説明するならば、自動車の生産は、技術的な合目的性にしたがい、よりよい機能を追い求める。またこの機能の進展が社会に接合され、よりよく機能するならば、自動車はより多く生産される。それにしたがって社会もまたより機械化の度合いを深めることになる。つまり、大量生産の実現のためには、まず労働が大規模な仕方で組織されねばならないが、この組織化もまた技術なしには可能ではなく、労働はますます機械化される。同時に自動車の普及は日常生活を機械化していく。このことは次のことを意味する。人間もまた機械装置の手段として目的が繰り延べられた機構の一員となるのである。機械機構は、そのまま労働も日常生活も取り込んでしまうのだ。

いったんこのような過程が始動すれば、「機械機構 Apparatur」はあらゆる領域を自らのものにしていくだろう。ユンガーによれば、国家、経済、法制度などが「機構 Apparat」と呼ばれるのは、それらが機械機構の一部であるからであり、このことは端的に機械化の全面化、すべてが機械機構の部分となることを意味している。兄であるエルンスト・ユンガー

の「総動員」の概念に呼応しながら、弟フリードリヒ・ゲオルクは、いわば技術による全面的な動員を記述しているのである。しかし、この全面的な機械化は、国家による総動員よりも、おそらくより根柢的であり、より破壊的である。このことについては後に立ち返ることにしよう。

4

ヘーゲルの理性の狡知に言及したのはほかでもない、ユンガー自身が、ヘーゲル哲学と技術化の進展とのあいだに〈対応〉を見出しているからである。ヘーゲルにおいて、知の弁証法的運動が存在するものすべてを自らのものとしていくように、機械化の過程もすべてを自らの機能として飲み込んでいく。ここで重要なのは運動の概念であるとされるが、弁証法的運動とは結局のところ動力学の歴史過程への転用だとも言われる。つまり、現実の過程は、ヘーゲルが思考しようとしたのとは異なったかたちで、すでに彼の思考において表現されていたのである。

しかし、精神とは自由であり、絶対精神にいたる過程とは、精神が自由なものとして現象する過程ではなかっただろうか。ユンガーは、自由意志は錯覚であるとはっきり述べており、カントから観念論を経てニーチェの力への意志にいたる近代哲学を、意志の極度の自立化、自己目的化とみなしている。他方で意志というものの存在は認められている。すべては機械的な必然性によって生じるわけではない。意志というものの決定がやはり必要なのである。ユンガーによれば、意志は、それに先行するさまざまな条件によって規定されている。それは総称され素質〔Disposition〕と呼ばれているが、自由とは、ユンガーによれば、この素質という先行決定との関係においてあるものなのである。

本書ではヘーゲルに対してシェリングがつねに好意的に引照されているが、『人間的自由の本質』において自由は、このような先行するものにあらかじめ制約されることではじめて実在し、具体化するとされている。シェリングによれば、根源的行為 —— ユンガーにおける素質に対応する —— が、個々人のすべての行為の傾向性をあらかじめ制約する。シェリングとは異なるものの、ユンガーも似た発想をここで示している。自由とは先行するものとの関係における自己決定であるかぎりにおいて現実存在し、また必然的でもあり、かつ自由なのだ。

しかし、意志を絶対化するとき、それは破壊的なものになるとユンガーは言う。意志の過大評価は、それによって直接引き起こされる運動の過大評価となるが、運動というものは、それが強大であればあるほど、他を必然的に巻き込み、強制的な過程となる。つまり、ヘーゲルだけではなく、近代哲学全体が、ユンガーにとっては、技術化の過程に照応しているのである。

5

いずれにせよ、この技術化、機械化の過程の全体化、すなわち技術の完成に取り込まれない生などなく、それを阻む決定的な力も存在しないというのがユンガーの認識である。そのとき人間は機械機構に組みこまれることで死んだ時間を生きる。ユンガーは、近代科学を支える時計という機械が刻む時間を死んだ時間と呼び、有機体がそのうちで生を営む生きた時間から区別しながら、生というものが、とりわけ人間の生が、死んだ時間に侵食されていることを指摘している。この侵食は、当然のことながら、近代社会の生が機械装置によって浸透しつくされているからである。機械装置に組み込まれた人間は、死んだ時間を生きている。死んだ時間とは、測定可能であり、分割可能であり、反復可能な時間であるが、そこでは人間もまた測定可能であり、分割可能であり、反復可能な存在となる。

あるいは別の観点から述べれば、死んだ時間を生きるとは、人間が機械装置の部分となり動かされる存在になるということでもある。近代における労働、都市生活、娯楽でさえも、機械装置に順応することなしにありえないのならば、人間は動かされることによって死んだ生を生き、動かされることに、つまりそのような生を生きることに、快さえ感じていることになろう。

時間の観点からの技術の分析は、本書のもっとも鋭い認識が展開される部分ではあるが、この人間の死は、ユンガーによれば、根元的な力の復讐、すなわち大地の復讐でもある。先に述べたように、機械は根本的に動かされる存在であり、それゆえ機械は自らの動因を必ず外部にもつ。この外部とは自然にほかならない。機械機構はその力を自然から得る。それゆえユンガーは技術を本質的に力、それも「根元的力 elementare Kraft」（訳書では根源的力）であるとしている。エレメンタルとは、四大に由来するということであり、ユンガーはとりわけ技術の根源を火に見出している。ユンガーが火の起源を大地に求めているのは、太陽の火を人間はどうしても利用することができず、太陽が暖めた大地の火こそが技術を動かす力となるからである。

自然、ないし自然の根源的な力の簒奪を、ユンガーは採掘のイメージで語っているが、大地を切り裂き、傷つけることで吸い上げられた力は技術機構のなかで新たな力となる。この力は機械装置のなかで増幅され、強化されるからである。自然は強制的に機械的なもののなかで自らをおそらくは超えた力をふるう。そして技術が発展すればするほど、根元的な力は技術のうちで大きくなり、装置に遍在するだろう。この機械と自然の逆説は、この技術への洞察のもうひとつの核心をなす。

技術における自然の猛威は、人間に降りかかる。なぜなら、技術の発展は根元的力の増幅であり、かつ人間の機械装置化、すなわち死んだ時間を生きる存在にすることをもたらす。人間はそこでますます生きた時間を奪われ、生きながら死した存在となる。技術による全面的な動員が破壊的なのはこのためである。このことをユンガーは退行と呼んでいる。技術の発展、あるいは技術の完成とは生を死に変じる退行でもあり、それを可能にする力は、逆説的にも起源である大地の力なのだ。ユンガーは、近代社会を覆う技術化の進展が

限界に至ることを技術の完成と呼ぶが、それが限界をもつのは、技術が覆う世界が有限であり、技術が簒奪できる自然資源ないしエネルギーもまた有限であるからにほかならない。もちろん、技術化において死んだ存在となる人間もまた有限である。退行とは人間を死んだ時間が支配していくこと、ある種のカタストロフであり、ユンガーはそういう表現を用いないものの、死への退行である。

6

死への退行は近代の命運なのだろうか。それを免れる可能性はないのだろうか。人間の自由は、このような過程のなかでは根本的に損なわれてしまうのだろうか。ユンガーの診断は悲観的である。しかし、このような過程のなかで、抵抗 —— 人間のであれ、自然のであれ —— が唯一積極的に評価されているのは注目に値する。抵抗とは、たとえば機械装置に適応しないことにおいて端的に現れる。その極端な事例が事故である。もちろん、自然や機械装置自身も物質であるかぎり、機能に対する抵抗という要素ももつ。機械装置に組み込まれるかぎりで、人間がなす抵抗も、現象的にはそのような物質の抵抗と変わりはない。しかし、人間の抵抗は、精神性と意志によって「より深い秩序 eine tiefere Ordnung」より汲み取られるのだとユンガーは言う。この秩序が何を意味するのかは明らかではないが、ここにユンガーは意志 —— たんなる自由意志ではない意志 —— にわずかだが別の可能性を見出しているように思われる。

技術的組織は、自然をそしてまた人間を簒奪する。技術の完成は両者を奪い尽くしたときに終りにいたる。したがって、技術によって収奪できないものがあるのかという問いが重要となろう。この問いに否定的であるならば、技術の完成によって私たちはある仕方で終焉を迎えることになり、肯定的であるならば、技術化の過程は終わりのないものになる。後者の可能性を検討した場合、ユンガーの立場は、どのように捉えられるだろうか。

ユンガーから少し離れて考えることにしよう。人間の生が機械装置に連関するとしても、技術の外部はつねに存在しうる。機械機構が自らを再生産できないとすれば、機械機構は自らの存続のために、人間の生の再生産を維持するとも言えるが、ここにいわば機械化の進展が孕む裂け目がある。この裂け目を超えることなしには、技術的組織は自らを維持、拡大できないからである。したがって、機械機構は自らの外側を必然的に容認することになろう。

技術の外部の生とはどのような生だろうか。生きた時間を生きる生はいまだに可能なのだろうか。たとえば老人の生は、最先端の医療技術に支えられているとしても、逆説的に技術の外部にあるのではないか。なぜなら、老人の生は機能するという連関を限りなく欠いているからである。新生児の生も同じである。老人の終りの生も新生児のはじまりの生も、それが生きた生であるのは、それが死んだ時間に規定されない固有のリズムをもっているからである。

ユンガー自身は、このような考察も行っておらず、例も用いていないが、技術に成熟は

ないと、またはっきりと「成熟は機械システムの外側にある」（183頁）と述べている。したがって、成熟する生は ―― その可能性を技術が奪い続けるとは言え ―― 技術が本質的に簒奪できないものである。その極限例が老人と新生児の生であると考えられよう。成熟を強制することはできないともユンガーは言う。成熟とは生きた時間の具体的な形象なのである。では、成熟とはいかなる成熟なのか。

ユンガー自身は述べていないが、以上のことからこの問いについての暫定的な答えを導き出しておきたい。成熟とは自らに先行するものを引き受けながら、自らの意志を自覚し、行為することによって生まれるなにものかである。自らの使命を自覚し行為することによって生まれるものと言い換えてもよい。自らに先行するものから人間は免れることができない。そして、その最大かつ最古の先行者が大地である。この大地のもとでの生を意志し、自ら決定することが、おそらく成熟かつ抵抗の可能性であろう。したがって、ユンガーが「より深い秩序」と呼んだのは、この大地のエレメント以外にはない。

皮肉であるのは、技術の完成への過程が、同じ意志が自らを先行者から切り離し、自らを純然たる自由意志だと錯視したことによってはじまるということである。この二つの意志の相克、その帰結について見通すことは難しい。しかし、すくなくともユンガーは、成熟したものの見方を、〈対応〉と〈照応〉による方法を通して本書ではっきりと示している。

7

『技術の完成』は、全46章と補遺「世界大戦」からなるが、それぞれなかば独立した主題を扱い、またなかば連続的に議論が展開されるという構成をもっている。決して読みやすいものではないが、そこでは上に触れた主題だけではなく、大衆、映画、スポーツ、イデオロギーなどと技術との関係も論及されている。読者は自分の関心から個々の章を読みすすめることもできるだろう。

翻訳書が底本とするのは1953年の増補改訂版である。監訳者三人がそれぞれの視点から訳者解説を執筆しており、本書のまたとない導入となっている。原書では各章に番号が振られているだけだが、訳書では、それぞれの章に内容をあらわす表題が補われていることは、読者の大きな助けになるだろう。この画期的な技術論の翻訳をよろこびたい。

（人文書院、2018年）